

◆ 障害学会第 16 回京都大会 シンポジウム

● タイトル 「脱施設—なぜ進まないのか?どうしたら進むのか」

● 登壇者

【シンポジスト】

鈴木良 (琉球大学)

小泉浩子 (日本自立生活センター)

【司会】

木口恵美子 (鶴見大学)

麦倉泰子 (関東学院大学) (兼・指定討論者)

● 企画趣旨

2016 年 7 月 26 日に神奈川県にある知的障害者支援施設、津久井やまゆり園で 19 人の入所者が元職員に殺傷される、戦後最悪といわれる事件が起きました。入所施設で集団生活を送っていなければ、こんなにも多くの命が奪われることはなかったという意見が多数ありましたが、県は再び同じ敷地に施設を建設することを決めました。そして、入所者は施設を出たいという意思を示さなければ、施設に戻ることになっています。

これまでに、宮城県の船形コロニーや長野県の西駒郷など、いくつかの知的障害者の大規模施設が地域移行を進めることで脱施設に取り組みました。しかし、果たして、どこまで脱施設は進んだといえるのでしょうか?

地域移行の受け皿として期待されたグループホームについても、施設からよりも家庭から移ることの方が多く状況です。また、2018 年に国はグループホームの定員を増やし、日中も過ごすことを想定した日中サービス支援型共同生活援助の姿を示すなど、グループホームの施設化が着実に進んでいます。

一方、近年、知的障害や自閉症の障害が重いとされる人たちが 24 時間の介助を受けて地域で一人暮らしをする様子が、映画等のメディアを通して知られるようになりました。施設でもグループホームでも親の家でもない自分の住まいで暮らすという、当たり前のことを進めるために何が必要なのでしょうか。

本企画では、集団ではなく個人の生活に必要な支援を考えるため、「地域移行」ではなく「脱施設」という言葉を用いたいと思います。

そしてシンポジウムでは、一貫して脱施設をテーマに調査研究をされ新著『脱施設化と個別化給付——カナダにおける知的障害福祉の変革過程』(現代書館)を出版された鈴木良さん(琉球大学)と、日本自立生活センター(JCIL)の小泉浩子さんにご登壇いただきます。鈴木さんからは国内外の知的障害者施設の脱施設の現状を、小泉さんには知的障害者施設を退所した後の自立生活を支える JCIL での介護派遣等の取り組みや課題についてお話しいただきます。

全体の司会は、木口恵美子(鶴見大学)、麦倉泰子(関東学院大学)が務めます。麦倉さんには、著書『施設とは何か——ライフストーリーから読み解く障害とケア』(生活書院)を基に、指定討論者として論点等を示して頂き、さらにフロアの皆さんとともに、脱施設を障害学はどのように捉えてきたのか、そして今後どのような論点を提示していけばよいのかについて、議論していく予定です。